



令和元年 7 月 3 日
独立行政法人 国立科学博物館

科学を文化として育む博物館を目指す 「科博イノベーションプラン」を発表

独立行政法人国立科学博物館（館長 林良博）は、6月27日（木）に国立科学博物館（筑波地区）において「科学系博物館イノベーションセンター設立報道発表及び筑波標本収蔵庫見学会」を開催しました。

発表会では、「科学系博物館イノベーションセンター」を4月1日に設立したことと、今後、当館が取り組んでいく方針として「科博イノベーションプラン」を発表しました。

当館は、今後、国内はもとより訪日外国人にも魅力ある施設となり、インバウンドの促進に貢献し、来館者300万人時代の実現を目指してまいります。

同時にナショナルセンター機能を担う博物館として、自然史・科学技術史の実証的研究の中核機関としての基盤強化を進め、ナショナルコレクションの充実に注力するとともに、併せて地域博物館との連携を強化し全国的な科学系博物館の事業活性化に貢献していきます。

「科博イノベーションプラン」は、

1. 国際的にも魅力的な博物館としての整備
2. 博物館活動の基盤である研究機能の強化とコレクションの充実
3. 多様な財源確保方策の実施
4. 科学系博物館等との連携強化

の各項目について、その実施イメージを具体的な13の案としてまとめたものです。

（別添1）科学系博物館イノベーションセンターについて（概要）.pdf

（別添2）科博イノベーションプラン（全文）.pdf

（別添3）科博イノベーションプラン（実施イメージ）.pdf

本件に関する照会先

独立行政法人 国立科学博物館

科学系博物館イノベーションセンター 中島、岩崎

TEL : 03-5814-9191 E-Mail : innova@kahaku.go.jp

<背景> ○経済財政運営と改革の基本方針2017～人材への投資を通じた生産性向上～（平成29年6月9日閣議決定）

○文化経済戦略（H29.12.27策定）

- ▶文化経済活動を通じた地域の活性化（V.基本となる「6つの視点」より）
 - ・地域の文化や芸術祭、文化施設等文化芸術資源の面的・一体的整備を推進し、産業・観光等他分野と連携した地方創生を実現
- ▶文化芸術資源（文化財）の活用（VI.推進すべき「6つの重点戦略」より）
 - ・公的空間での展示や国際交流、教育での活用等、様々な場面における文化財の活用を促進するため、文化財の高精細デジタルアーカイブ化や、高精細レプリカ、VR等先端技術との連携による取組を推進。

今後の博物館のあり方を考える上で、科博を含む自然史・科学技術史系の博物館もわが国の文化の振興を担う一翼として、その資源を活用し新たな価値を創出し持続的な発展につながる好循環の構築に貢献する必要がある。

科学系博物館イノベーションセンターの目標

博物館資源を活用した新たな取組による
経営基盤の強化

蓄積された博物館資源の循環による
地域博物館も含めた事業活性化

資源活用による目標達成

標本資源の活用

- ・470万点の標本資料
- ・研究用データベース 等

人的資源の活用

- ・専門分野の研究者
- ・専門技術を有する技術スタッフ

展示学習資源の活用

- ・展示コンテンツ
- ・学習支援活動のノウハウ 等

その他資源の活用

- ・歴史的建物
- ・ブランド価値 等

オープンイノベーション

異業種・異分野の事業者

異なる業種、分野の事業者のアイデア、ノウハウ、技術等を組み合わせ、従来の博物館にはなかった新しい事業スキームを構築
・民間企業 ・大学 ・地方自治体 ・各種メディア 等

科学系博物館における資源活用による事業活性化と収入の拡大にかかるノウハウの提示・横展開により、地域住民の自然科学に対する理解増進と同時に、地域振興にも貢献できる博物館のモデル構築に貢献する。

科学系博物館イノベーションセンターの役割

国立科学博物館

既存部署はセンターの先導の下、引き続き資源の効果的な活用を念頭に基幹事業の遂行を通じて博物館資源の開発・蓄積を行う。

経営管理部

事業推進部

連携推進・
学習センター

各研究部

産業技術史
資料情報
センター

標本資料
センター

筑波実験
植物園

附属自然
教育園

異業種・
異分野
事業者

民間企業
大学
地方自治体
各種メディア

地域博物館

学校 等

科学系博物館イノベーションセンター

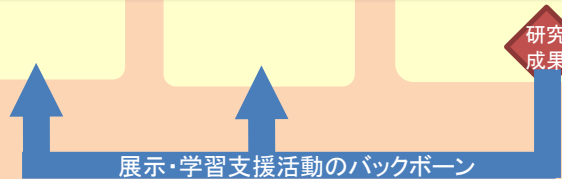
館内の横断的組織として、従来から開発・蓄積されている国立科学博物館の持つ資源を活用し目標達成のため持続可能な事業開発の司令塔的役割を果たすとともに、オープンイノベーションを取り入れたスキームの構築を目指す。

役割
1 活用ビジョンの提示
(司令塔的役割)

- ★インバウンド・マーケティング
- ★標本資料のデジタル化と活用
- ★多様な巡回展示の開発
- ★賛助会員・ユニークベニュー
- ★科博イノベーションプランの策定
- ★事業モデルの普及

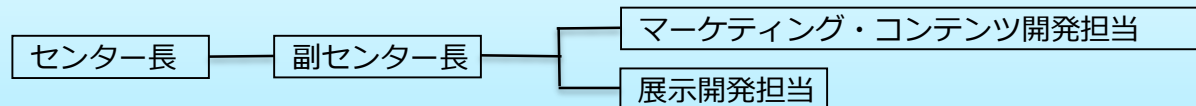
★オープンイノベーション

役割
2 スキームの構築



(参考)

科学系博物館イノベーションセンター組織図



自己収入確保方策

基盤事業の充実には引き続き注力し入館料収入の維持に努めるとともに、無料入館範囲の見直し等による増収も検討する。同時に多様な手法による自己収入の増大策に努める。



○賛助会員・ネーミングライツ、寄付の積極的募集

○クラウドファンディングによる資金調達

○ユニークベニュー

- ・フィルムコミッション、ロケツアーリズムとの連携
- ・イベント等多様な用途での活用を促進（ウェディング会社、イベント会社等との提携）

○専門人材の活用

- ・旅行会社と提携し専門知識を有する研究者同行のプレミアムフィールドツアーの実施

○科博展示ノウハウのパッケージ化と普及

- ・人気施設である「親と子のたんけん広場 コンパス」や「モノ語りワゴン」の展示及び運用ノウハウをパッケージ化。
- ・民間集客施設や市街地再開発計画等も含めた多様な施設への導入による全国展開を目指す。

インバウンドマーケティング

海外への積極的な情報発信に努めるとともに、関係機関における調査、営業ノウハウの取得に努め旅行代理店等との協議を進める。併せて外国人が過ごしやすい快適な館内の観覧環境整備に努める。

○外国人入館者の現状

- ・外国人来館者の割合は5%前後(H30:約12万人 うち日本在住約15%)
- ・国別割合推計(H30年度 3回の総当りアンケート調査結果による)
 - ①中国(17%) ②アメリカ(12%) ③タイ(9%) ④オーストラリア(7%)
 - ⑤台湾(7%) ⑥韓国(5%) ⑦イギリス(3%) ⑧フランス(3%)
- ・主要な来館目的
 - ・「自然史・科学」(当館のテーマ性への関心)
 - ・展示(恐竜、ハチ公)
 - ・旅行のついで
 - ・子供の教育等

○外国人観光客の来館促進

- ・Twitter, Instagram等SNS、動画サイト 等での積極的な情報発信。
- ・外国人向け目玉展示の発掘と積極的アピール
- ・観光誘致関係企業への営業活動

○外国人観光客への対応改善

- ・多言語対応スマホ用解説コンテンツを製作
- ・外国人向けおすすめ見学コースの設定とアプリ提供
- ・外国人目線の展示解説の改善



標本・展示資料のデジタル化と活用

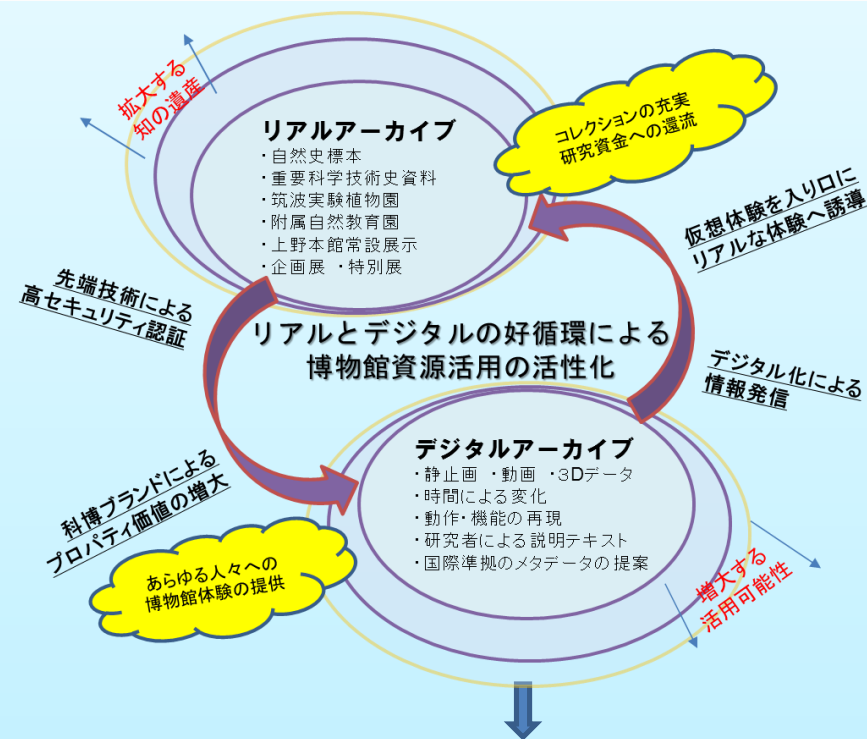
文化庁のデジタル・アーカイブ化推進は各所で本格的な構築が進んでおり、自然史・科学技術史資料についても、研究的な活用と商業的活用の両面を意識した「**標本資料の活用**」モデルを構築し、当館がナショナルミュージアムとして示していく必要がある。

○標本資料の活用範囲の拡大

- ・ オープンサイエンス促進のための**デジタルアーカイブ構築体制整備**。
- ・ 公開と二次使用のための規則を整備し、研究目的・商業目的の利活用を促進するための**ワンストップサービス（手続き一本化）**を実現。
- ・ 質・量の両面で**アジアNo.1の自然史・科学技術史系デジタルアーカイブ**の公開を目指し、最先端のICT技術等を導入し、実物標本に裏付けられたデジタルデータが提供される仕組みを開発。
- ・ アーカイブ化された標本資源を活用し、**プロパティ・ライセンス**をライセンシーに預けて販売する仕組みを検討。
- ・ 地域博物館もデータをアップロード可能な共通フォーマットを整備し、各館が活用して収入を得ることが可能となる**事業連携の仕組みの構築**。

○標本資料の重要性の認知度向上

- ・ デジタル・アーカイブ化と並行し、**標本庫等のVR見学ツアー**を開発。
- ・ 標本保全のために公開回数が限られる貴重な**標本資料の価値の認知**を促し、デジタルデータの商業的な利活用を促進。
- ・ 科博が実施する展示・学習支援事業のアーカイブ化と活用も目指す。



○期待される成果

- ・ 収益が研究やコレクションの充実のための資金として循環。
- ・ AIによるデータ解析を利用した新たな研究の可能性の開拓
- ・ VR・AR、MR等の先端技術を利用した新たな展示手法、教育手法の開発

標本・展示資料のデジタル化と活用（具体例）



事業連携
地域博物館もデータをアップロードしてシステムを利用できる。

国立科学博物館
デジタルアーカイブ構築

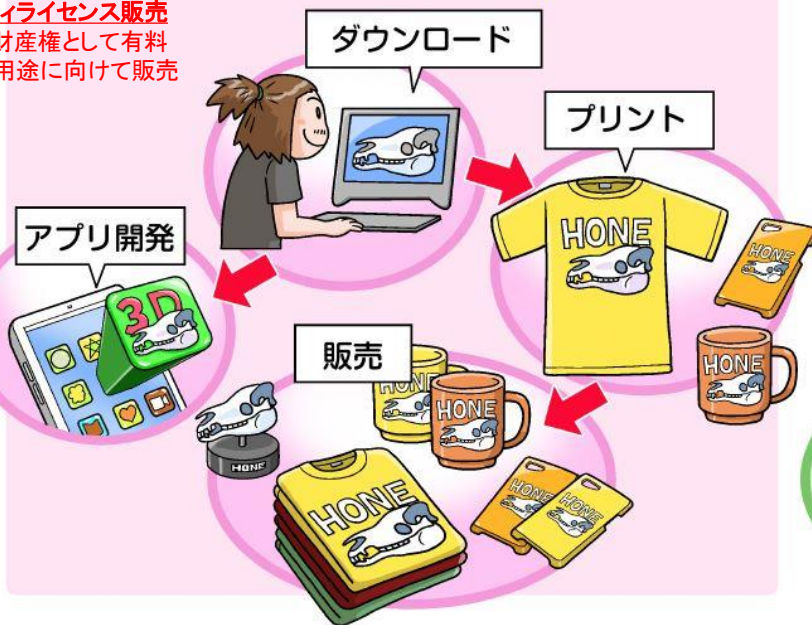


オープンサイエンス
研究者だけではなく誰もがアーカイブにアクセスできる

ワンストップサービス
オンラインでの簡単な手続きで利用できる

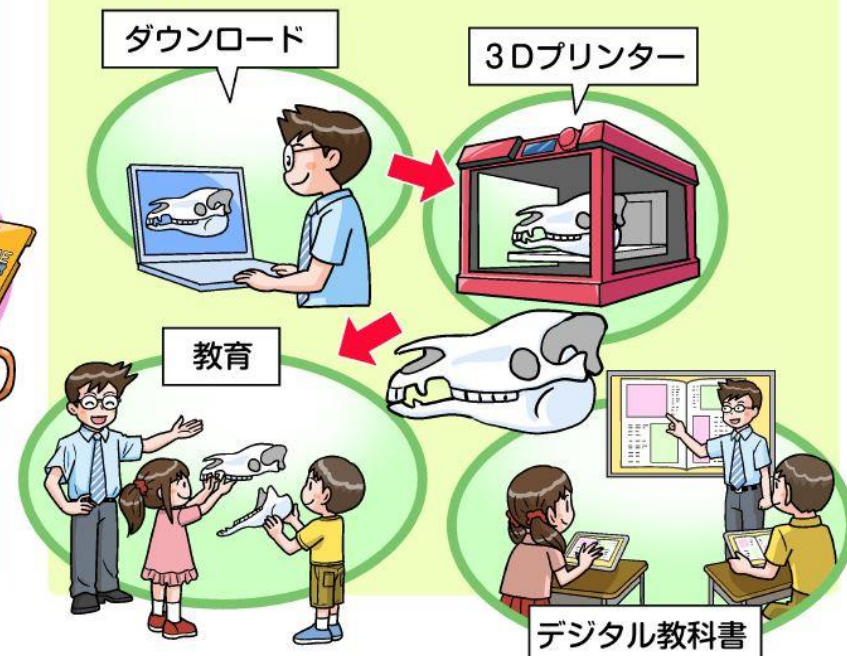
商用利用

プロパティライセンス販売
データは財産権として有料で様々な用途に向けて販売できる



教育利用

科博の認証済データ
実物標本に基づいた科学的に正確なデータを利用して製作ができる



多様な巡回展スキームの開発

科博がコーディネートすることで、地域館を主体とした複数の博物館の協働による質の高い展覧会を実施できるスキームを構築し、地域の博物館の収益と意欲の向上に貢献する。

【開催スキームの例】

A:資金拠出型巡回展

共通テーマのもと複数の博物館が協働して標本を出し合い企画展を作り巡回させる。企画は協働WGで検討するが、製作時は、費用含め科博が一括製作し、開催時に各参加館が自己負担分に相当する費用を拠出する。

各参加館は拠出資金以上のクオリティの企画展を実施できるため集客の向上が期待され、入場料金増加により「拠出資金の原資+a」の収入が期待できる。

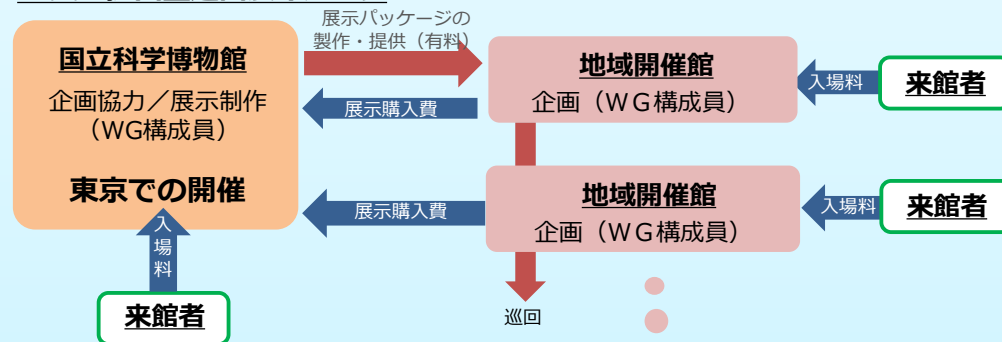
B:企画販売型巡回展

- ・ 国立科学博物館の標本のみで構成した展示パッケージを開発・製作、販売する。
- ・ 国立科学博物館及び地方開催館への直接の自己収入の増加に寄与する。

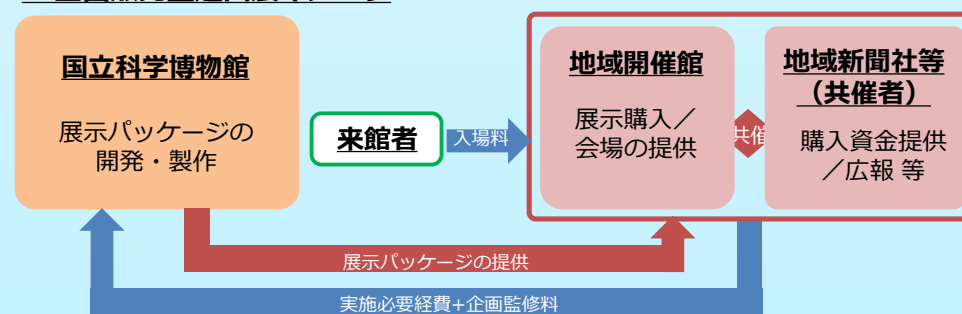
C:教育現場での巡回キットの活用

- ・ 小型の巡回展キットを学校に貸し出し、講堂、空き教室等で展開する。
- ・ VR、AR、MR等の先端技術を活用し授業にも活用可能。
- ・ 科博収蔵庫とネットワークで結び、膨大な資料を背景に研究者が直接講義も可能。
- ・ 地域博物館が核となって近辺学校の巡回も可能。

A:資金拠出型巡回展イメージ



B:企画販売型巡回展イメージ



※地域支援型巡回展

- ・ 科博が一部経費負担する被災地における復興コラボミュージアムなどの地域支援型の巡回展は、必要に応じて今後も継続する。

国立科学博物館「科博イノベーションプラン」

～科学を文化として育む博物館を目指して～

当館では 2001 年の独法化当時には年間約 90 万人であった来館者数が、その後の展示内容の充実等の要因により 2017 年度には 288 万人と 3 倍以上に増加した。今後、国内はもとより訪日外国人にも魅力ある施設となり、インバウンドの促進に貢献し、来館者 300 万人時代の実現を目指す。

同時にナショナルセンター機能を担う博物館として、自然史・科学技術史の実証的研究の中核機関としての基盤強化を進め、ナショナルコレクションの充実に注力するとともに、併せて地域博物館との連携を強化し全国的な科学系博物館の事業活性化に貢献する。

それらの活動を通じて科学を文化として育む博物館となるためのイノベーションプランを以下のように策定し、順次、取り組んでいく。

1. 国際的にも魅力的な博物館としての整備

プラン 1-① 魅力ある多様な展示と学習プログラムの充実

- ▶ 多くの来館者のニーズに応えるため、常設展示の段階的リニューアルを進め、最新の学術動向に合わせた情報の体系的な発信、科学の基本的原理の理解を図るための体験型展示の更なる充実、自然史と科学技術を中心とした人間活動の歴史を総体的に見通す横断的展示等の魅力ある多様な展示を展開する。
- ▶ 筑波地区において標本を公開し、また、ICT 技術を活用しオンラインで上野地区において収蔵庫のバーチャル体験ができるシステムを開発する。
- ▶ 芸術等、自然科学以外の分野との連携を積極的に進め、これまでにない切り口からの企画展示を実施し、新しい顧客層の開拓を進める。
- ▶ STEAM 教育（科学と芸術の融合教育）や「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）を踏まえた探究的な学習の考え方を取り入れた新しい学習プログラムや IoT や AI 技術を活用した新しい博物館体験の開発を進める。

プラン 1-② インバウンド対応を意識した展示の充実

- ▶ 日本文化に精通した外国人翻訳者等を活用し、外国人目線の分かりやすい展示解説への改善を行う。
- ▶ 日本の自然への理解促進及び地方の自然・景勝地訪問への喚起を図るために、世界的にも数少ない全天球型映像施設のコンテンツとして、外国人に関心の高い*日本の美しい自然や四季をテーマとした映像を製作公開する。
*訪日外国人が訪日前に期待していた事柄の上位 3 位以内に自然・景勝地観光が挙げられている（観光庁 2018 年年度報告書）
- ▶ スマートフォンを利用した展示解説を多言語で提供するとともに、見学の便宜を図るため目玉展示を短時間で回れるコースなど、外国人来館者が手軽に楽しめる「おすすめコース」（日本の自然史コース、日本の工学・技術の歩みコースなど）を多言語で提供する。

▶日本の特徴のある植物（文化に関係の深い植物、固有植物、絶滅危惧植物）をテーマに日本の文化と自然史を融合させた外国人向けの展示開発を行う。（筑波実験植物園）

プラン1-③ 国内外への情報発信の強化

▶外国人の視点でどのような情報が好まれ、求められるのか等の調査・分析を行い、SNS等も活用した効果的な情報発信を行う。秋田犬ハチなど海外でも知られている展示物や海外の博物館では見られないユニークな展示を抽出し積極的に発信する。

▶国内外に向け、多様な科博の公式動画（目玉展示の紹介、コレクション紹介、研究紹介（成果やフィールド活動）等）を作成し、動画サイト等で公開することで、科博のプレゼンス向上を図る。

▶旅行代理店等と連携した海外への情報発信、海外の旅行会社に企画ツアーへの組み込みを営業する。

プラン1-④ 来館者目線に立った安全で利用しやすい環境づくり

▶来館者 300 万人時代の実現を目指し、多様な来館者の入館に対応した券売所やカウンターの整備、館内サインの整備を行い、快適な観覧環境を提供する。

▶キャッシュレスチケットやデジタルサイネージによる情報提供、スマートフォンを利用した館内誘導サービスの導入を進める。

▶1日では見切れないほど広い博物館を楽しんでもらうためのナイトチケット（17時以降の入館料割引や翌日の再来館時の割引）や2 days パスなどの導入について検討を進める。

▶修学旅行シーズンなど多くの児童・生徒が来館する期間に、より利用しやすい環境を提供するため、学校向けの早朝開館等柔軟な運用を図る。

▶現在、金曜日及び土曜日に実施している20時までの延長開館時の主な利用者である社会人等が来館しやすい曜日等を検証し、ニーズに合った延長開館を実施する。

▶来館者の安全確保のため、顔認証システムなどを組み込んだ次世代型防犯カメラネットワークシステム導入の検討を進める。

2. 博物館活動の基盤である研究機能の強化とコレクションの充実

プラン2-① 自然史分野と科学技術史分野の中核的研究機関としての機能強化

▶自然史分野と科学技術史分野という基礎研究を担う中核的研究機関として、研究機能及び標本資料の収集保管機能の強化が必要である。そのために専門人材の配置、後継人材育成のための大学等との連携強化、標本資料の収集保管施設の充実を図る。

プラン2-② 分野横断的研究と先進的手法の活用

▶世界的に見ても珍しい存在である自然史と科学技術史の両分野を扱うナショナルミュージアムとしての強みを活かし、各研究部が連携し、時代に即した分野横断的研究プロジェクトを一層推進する。

▶標本資料を基盤とする実証的研究をベースに、DNAを用いた分子系統学的手法などの先進的な分析手法を積極的に取り入れることにより系統分類学の発展に寄与する。生物多様性の保全やSDGs*といった現代的な課題への対応や、日本人の起源や独特な発展を遂げた日本の科学技術の発展史の解明を推進する。

*2015年に国連で採択された「2030 アジェンダ」の中で示された「持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」のこと。

プラン2-③ 研究成果の積極的な発信

- ▶「博物館の基礎は標本資料・コレクションとそれに基づく実証的研究である」という、博物館の活動に対する理解増進を図るために、自然史研究と科学技術史研究のプロセスやその成果を展示や学習支援活動など様々な手法で周知し、文化としての科学を醸成することにつなげる。また、併せて SNS やニュース展示を通じた速報性のある情報発信活動を行う。
- ▶標本資料の保存、デジタル化、調査研究というプロセスを可視化し、博物館の研究活動への関心を高めるため、研究者によるディスカバリートークを研究現場や収蔵庫などからオンラインでライブ配信し臨場感を感じられるシステム導入の検討を進める。
- ▶標本資料を基盤とする実証的研究において、研究成果だけでなくその証拠としての標本資料情報を積極的に発信することにより、オープンサイエンスを推進する。

プラン2-④ コレクションの充実と収蔵庫の整備

- ▶コレクションは博物館のあらゆる活動の基盤となる資源であり、コレクションの量的な充実のみならず、ナショナルコレクションとしての高い質を維持するため適切な保管環境の確保が必要である。また、上野本館の展示では約 470 万点のコレクションのごく一部しか公開されていないことから、研究部に収蔵された大多数の標本資料の存在を社会に可視化し、今後のコレクションを充実させるため新たな次世代型展示収蔵庫の建設に向けて取り組む。
- ▶科博は国内の自然史標本情報を集約し、その国際的視野での利用を目指して GBIF*の活動に参加しているが、その国内利用推進のため「S-Net」*を運営して日本中の博物館・大学等から生物多様性データを収集している。これらのナショナルコレクションセンター機能を充実させるために、コレクションマネージャーの配置を検討する。また、貴重な過去の生物多様性情報を担った物的証拠の逸失を防ぐために標本のセーフティーネット機能を強化する。
- ▶質・量の両面でアジア No.1 の自然史・科学技術史系デジタル・アーカイブの公開を目指し、最先端の ICT 技術等を導入し、実物である標本に裏付けられたデジタルデータが提供される仕組みを開発する。

*GBIF（地球規模生物多様性情報機構）は 2001 年に設立された生物多様性情報のオープンな提供機構のこと。

*S-Net（サイエンスミュージアム・ネット）は、科博が運営する日本全国の博物館・研究機関の標本情報、採取情報、研究員・学芸員情報を横断的に検索できるサイトである。

プラン2-⑤ コレクションの多様な用途への活用

- ▶デジタル・アーカイブ化された自然史・科学技術史系標本資料の学術・教育的な活用と商業的な活用の両面を意識した「標本資料の活用」モデルを当館が先導して構築する。
- ▶標本資料の 3D デジタル化、標本資料情報のデジタル化・データベース化をより一層推進することにより、当館所蔵標本資料の商業目的での有料提供、教育的目的での無料提供・利用を目指し、広く国内外へ提供し活用できる環境を整備する。
- ▶デジタル・アーカイブを資源として活用し、プロパティ・ライセンスを販売する仕組みの調査検討を進める。
- ▶地域博物館が所蔵する標本資料をデジタル・アーカイブ化して登録することで、地域博物館も収入を得ること

が可能となる共通フォーマットを整備する事業連携の調査検討を進める。

▶コレクションを活用して学校教育現場でも利用できるような教材パッケージを製作し貸し出すとともに、学校とオンラインで研究者が収蔵庫から遠隔講義をすることができるシステムの導入を進める。

3. 多様な財源確保方策の実施

プラン3-① 寄付、施設貸与(ユニークベンチャー)等の促進

- ▶クラウドファンディングやネーミングライツ等を活用した外部資金の戦略的な獲得を進める。
- ▶重要文化財である日本館の歴史的雰囲気や上野公園内というロケーションの良さを活かしたユニークベンチャーの積極的誘致(フィルムコミッション、ロケツアーリズムへの対応、ウェディング関係イベント、新商品発表会など)を進める。
- ▶次世代を担う青少年の継続的な育成や質の高いサービスの持続的な提供を図るため、入館料等料金体系の見直しを行う。

プラン3-② 専門人材の活用や人気コンテンツの製品化と普及

- ▶民間と連携した受託研究、共同研究等への積極的な取り組みを行う。
- ▶旅行会社主催の研究者同行プレミアムツアーへの実施協力など、当館の専門性を活かした企画を開発する。
- ▶未就学児向け人気体験展示「親と子のたんけんひろば コンパス」の移動型パッケージを開発し、製品化する。
- ▶美しい標本資料を活用した室内装飾に利用できる展示キットを開発し、企業及び集客施設等への貸し出しを行う。

4. 科学系博物館等との連携強化

プラン4-① 巡回企画展・地域館連携企画展の充実

- ▶地域博物館発のアイデアを科博がコーディネートして複数の地域館の連携を実現し、地域館単独では実現できない品質、規模の連携企画展を協働で製作・巡回することにより、入館者や収入の増大を図り、地域振興に寄与する。
- ▶科博の所蔵標本を利用した新たな巡回展パッケージを製作し、博物館のみならず、集客施設等にも貸し出しを行う。また、海外の博物館等と連携した事業実施についても検討を進める。
- ▶支援を必要としている博物館に対して、標本資料の無償貸与にとどまらず、企画展などの実施ノウハウや助成情報の提供等により効果的で持続可能な支援を行う。

プラン4-② 学芸員等の研修、ネットワーク化支援

- ▶全国科学博物館協議会や各都道府県の博物館協議会等と連携し、地域内の博物館が資料の相互利用及び展示や研究のノウハウを共有するネットワークの構築を通じて、地域博物館の活性化の支援を推進する。
- ▶新時代の博物館に求められる学芸員等の資質を高めるために各地で研修を開催し、ネットワーク化を支援する。また、e-learning等の情報通信技術を活用した効率の良い講習を実施する。
- ▶学芸員の技術の伝承へのバーチャルリアリティ技術等の活用について調査検討を進める。

『科博イノベーションプラン』 ～科学を文化として育む博物館を目指して～

2019年6月27日



国立科学博物館

科学系博物館イノベーションセンター

センター長 池本 誠也

科学を文化として育む博物館

今までの科学博物館は…

- 「科学好きな人たち」が集まる場所というイメージ

これからの科学博物館は…

- 「誰でもが」新しい発見や驚きに出会える場所に



科博イノベーションプラン



国立科学博物館「科博イノベーションプラン」

～科学を文化として育む博物館を目指して～

2001年度
(独法化)
90万人



展示、学習支援
活動の充実

第4期

(2016～2020)

中期計画平均

267万人 *1



科学を文化とし
て誰もが楽しむ
気風の醸成

第5期

(2021～2025)

中期計画以降

300万人時代の
実現を目指す

科博イノベーションプラン

1. 国際的にも魅力的な博物館としての整備

2. 博物館活動の基盤である研究機能の強化とコレクションの充実

研究
成果

展示・学習支援活動の
バックボーン

3. 多様な財源確保方策の実施

4. 科学系博物館等との連携強化



*1) 第4期中期計画中の2016～2018の3年間の平均



科博イノベーションプラン

1. 国際的にも魅力的な博物館としての整備

- プラン1-① 魅力ある多様な展示と学習プログラムの充実
- プラン1-② インバウンド対応を意識した展示の充実
- プラン1-③ 国内外への情報発信の強化
- プラン1-④ 来館者目線に立った安全で利用しやすい環境づくり

2. 博物館活動の基盤である研究機能の強化とコレクションの充実

- プラン2-① 自然史分野と科学技術史分野の中核的研究機関としての機能強化
- プラン2-② 分野横断的研究と先進的手法の活用
- プラン2-③ 研究成果の積極的な発信
- プラン2-④ コレクションの充実と収蔵庫の整備
- プラン2-⑤ コレクションの多様な用途への活用

3. 多様な財源確保方策の実施

- プラン3-① 寄付、施設貸与(エーケニュー)等の促進
- プラン3-② 専門人材の活用や人気コンテンツの製品化と普及

4. 科学系博物館等との連携強化

- プラン4-① 巡回企画展・地域館連携企画展の充実
- プラン4-② 学芸員等の研修、ネットワーク化支援



科博イノベーションプラン1

1. 国際的にも魅力的な博物館としての整備

- プラン1-① 魅力ある多様な展示と学習プログラムの充実
- プラン1-② インバウンド対応を意識した展示の充実
- プラン1-③ 国内外への情報発信の強化
- プラン1-④ 来館者目線に立った安全で利用しやすい環境づくり

誰もが楽しめる博物館を目指して

- プラン1-① → 情報通信技術の導入でイノベーション
- プラン1-② → 外国人来館者対応をイノベーション




プラン1-① → 情報通信技術の導入でイノベーション

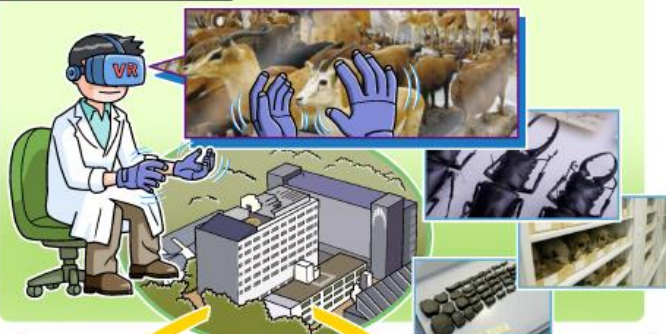
VR・MR技術を活用した収蔵庫のバーチャル体験

標本資料を基礎とした博物館活動への理解を深めるとともに、VR・MR技術により標本収蔵庫という新しい展示フィールドが広がります。


【実施イメージ】

 筑波地区

研究者によるトーク
研究者が収蔵庫から学校
や科博展示場に向けてトークを行います。




学校でのVR授業
学校では研究者と同じバーチャル空間を共有し、研究者と双方向のやりとりをすることができます。

 上野地区

収蔵庫のVR体験
展示場ではバーチャル映像で収蔵庫の圧倒的な標本群を見ながら研究者のトークを聴くことができます。



 教育現場





プラン1-② → 外国人来館者対応をイノベーション

インバウンド対応を意識した展示の充実

SNSや動画サイト等で日本文化につながるの深い展示情報等の海外に向けた情報発信を強化し、外国人の来館を促進するとともに、多言語によるおすすめコースや鑑賞アプリを開発し、来館者に提供します。

【実施イメージ】



リッピングアーカイブ(附属自然教育園)



さくら草展
日本の文化につながるの深い植物をテーマとした展示。



科博イノベーションプラン2

2. 博物館活動の基盤である研究機能の強化とコレクションの充実

- プラン2-① 自然史分野と科学技術史分野の中核的研究機関としての機能強化
- プラン2-② 分野横断的研究と先進的手法の活用
- プラン2-③ 研究成果の積極的な発信
- プラン2-④ コレクションの充実と収蔵庫の整備
- プラン2-⑤ コレクションの多様な用途への活用

自ら発信し活用される博物館を目指して

- プラン2-③ → 研究プロセスの発信をイノベーション
- プラン2-⑤ → コレクション活用をイノベーション



プラン2-③ → 研究プロセスの発信をイノベーション

クラウドファンディング等を活用した市民参加型研究

研究活動への関心や理解を深めるために、誰もがその研究の実施プロセスに関わり参加できる仕組みを作ります。

【実施例】



丸木舟の3D画像
イノベーションセンタースタッフ
の森健人がデータ計測し作成

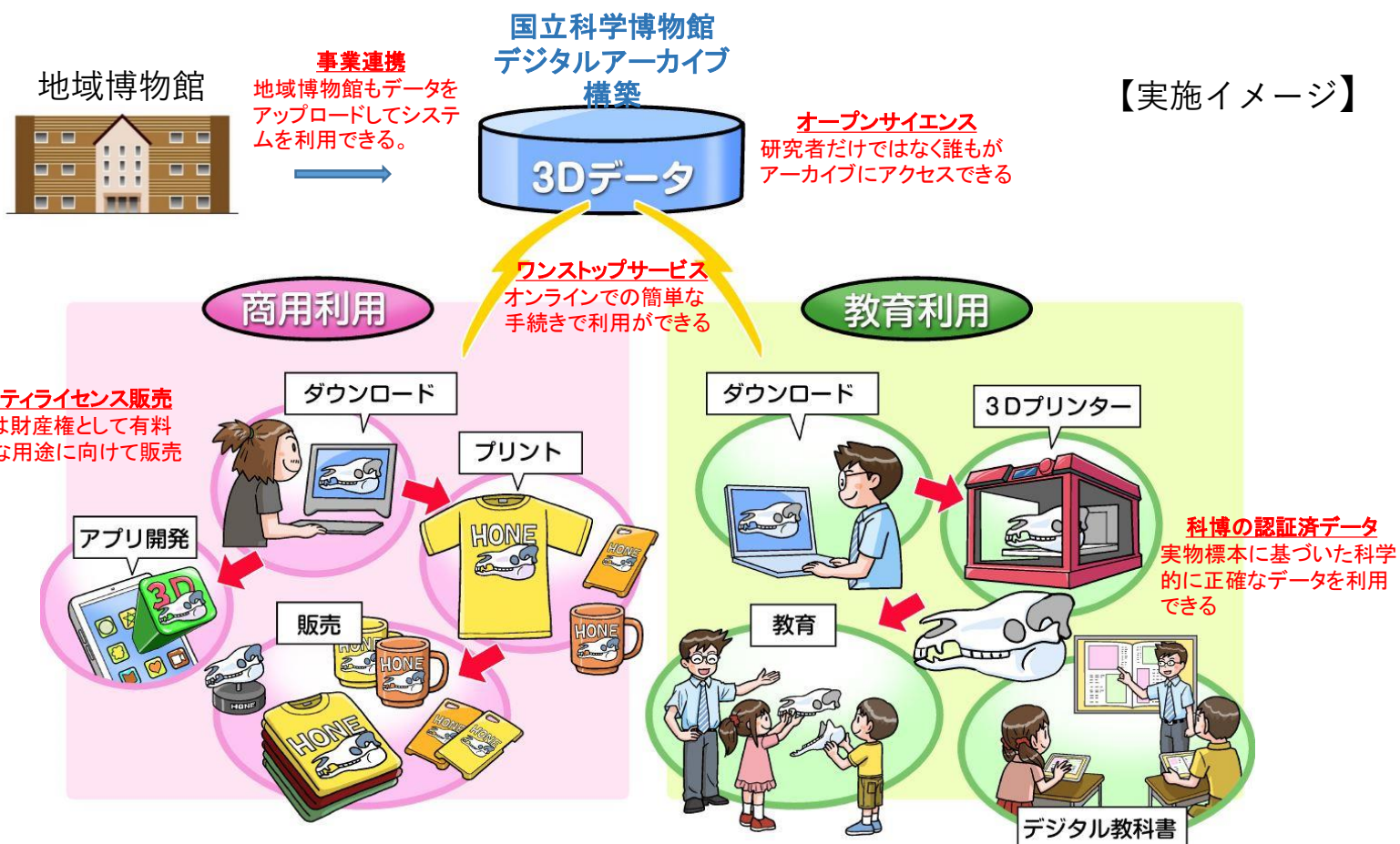
**3万年前の航海
徹底再現プロジェクト**
国立の博物館として初めての
クラウドファンディングの
実施例。寄付も含めて約1
億円の資金を調達。



プラン2-⑤ → コレクションの活用をイノベーション

コレクションの多様な用途での活用

自然史・科学技術史系標本資料の学術・教育的活用と商業的活用の両面を意識した「標本資料の活用」モデルを構築します。





科博イノベーションプラン3

3. 多様な財源確保方策の実施

プラン3-① 寄付、施設貸与(エーケベニュー)等の促進

プラン3-② 専門人材の活用や人気コンテンツの製品化と普及

社会に求められ社会とつながる博物館を目指して

プラン3-① → ユニークベニューでイノベーション

プラン3-② → コンテンツ活用でイノベーション



プラン3-① →ユニークベニューでイノベーション

日本館の歴史的雰囲気やロケーションの良さを活かしたユニークベニューの積極的誘致

フィルムコミッションやロケツーリズムとも提携し、映画撮影、ウェディング、企業の新製品発表会等のイベントを積極的に誘致します。

【実施イメージ】



ウェディング

新製品発表会とレセプション





プラン3-② →コンテンツ活用でイノベーション

科博の人気コンテンツやノウハウの製品化と普及

「親と子のたんけんひろばコンパス」など科博の人気コンテンツやノウハウをパッケージ化した展示キットを開発し、博物館のみならず企業や集客施設等への普及を目指します。

【実施イメージ】



集客施設での展開



科博イノベーションプラン4

4. 科学系博物館等との連携強化

プラン4-① 巡回企画展・地域館連携企画展の充実

プラン4-② 学芸員等の研修、ネットワーク化支援

地域博物館と協働する博物館を目指して

プラン4-① → 巡回展示システムをイノベーション



プラン4-① →巡回展示システムをイノベーション

巡回企画展・地域館連携企画展の充実

複数の館が協働して企画する新しいスキームでの巡回展を科博がコーディネートします。それらの経験を通じて地域博物館の学芸員の意欲やスキルの向上につながることを期待されます。また、科博の標本を活用し、地域博物館や学校等で活用できるパッケージを開発します。

【実施イメージ】

学校での巡回キットの活用



科博の標本資料を活用した巡回展

もっと魅力ある博物館を目指して

上記の取組を通じて科博でなければできない体験があるということをもっと多くの人に知ってもらえるように

- 海外の方にアジア最大約470万点の標本資料をアピール
 - 日本の自然や動植物をまとめて見られる日本館
 - 地球の歴史が見られる地球館
 - 筑波と白金のリビング・アーカイブ（生きてる標本）
- 博物館の新しい楽しみ方を提案
 - 標本資料のデータのアートやビジネスでの活用
 - 芸術と科学の融合を意識したSTEAMな展示

もっと社会や地域とつながる博物館を目指して

オープンイノベーションにより社会の様々なセクターや地域とつながる新しい価値を共創

- ・官・学・民の連携だけではなく、NPOや市民団体等を含めた多元的なセクターともつながって共創していく
- ・今まで以上に地域の科学系博物館と協働し、地域の博物館の活動を支援し、地域振興に貢献

→社会に求められる博物館のモデルを形にする

科学を文化として育む博物館

- 科学系博物館が身近にあることで
毎日が楽しくなる
- 科学系博物館に行けば
驚きや感動に出会える
- 科学系博物館があることで
社会が豊かになる